

# 人間科学部人間発達学科における教員養成の在り方に関する試論 —現場のニーズに対応する視点から—

佐方 はるみ

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2019年10月29日受付、2019年12月18日受理)

## 要 旨

本学人間科学部人間発達学科は多免許多資格を取得できる。人間発達学科の主に児童発達コースでは多くの学生が小学校教員を目指している。教職課程では、教職に必要な各教科等指導法、知識、技能、教育実習、ボランティア活動体験等の学修がある。その過程において「教員に求められる資質能力」を学校現場のニーズに対応し、どんな教員像を目指して育てることが必要であるのかを求めた研究である。学び得た知識・理解・技能が現場で生きて働かなければ意味がない。教員採用試験合格することのみを目的化した教員養成ではなく、学生自身が目指す教員像を持ち「教員としての資質能力」を授業、体験、採用試験勉強をも含めた連続した教員養成の在り方を求め検証した。そこで、学生と現職とのアンケート調査や教職実践演習や学生の体験等により、何が効果的で必要なかを明らかにした試論である。現場と学生を繋ぎ育てる資質能力を身に付けた教員養成の在り方を継続研究したい。

キーワード：教員養成、教師、教員、教職、資質能力、学生と現職、

## 1 はじめに

特にここ数年学校現場を取り巻く人的・物的・環境等の変化は、必然的に働く教員にも影響している。また、全国学力状況調査による順位に各自治体が競う状況が生まれた。全国的に学力・体力向上のための方策が取られた。社会の変化とともに、教育現場にも、働き方改革、授業数の増加、教員の病休、授業改善、生徒指導、保護者対応等その他多岐にわたる課題が山積している。

改めて「学校とは」「教員の仕事とは」と考え、大学4年間でどのようにどんな教員を育成をすればよいのかを探るきっかけとなった。

本ゼミ生A（現在小学校教員）が、教師になるにあたってのこれからの求められる教師の資質能力について、本学生に調査したいということから、筆者は学生だけではなく現職と比較研究することから教員に必要な資質能力を探り、本学科の教職課程や改善できる内容や学生の自己実現を支援した在り方を試みた。本学を卒業し小学校教員として働く彼女達の自問自答しながらも、奮闘する姿にさらに大学教員養成の質が問われていると感じた。教職に就くという自己実現をしながら、現実の厳しさに直面しながらも日々求められる社会のニーズに前向きに取り組んでいる姿に大学も応えなければならない。教師は、学校組織の多様な役割を担っている教職員の一員でもある。

### (1) 研究の目的

本研究をするにあたっては、主に本学本学科卒業生の現職小学校教員（他大学卒業の若年教員も若干含む）と本学在学学生を調査研究することにより、教職課程や授業、教員採用対策等における改善点を出し継続実践することにより、研究主題「本学科の教員養成の在り方」を明らかにしたい。

### (2) 研究の方法と内容

- ア A学生卒業研究論文「これからの教員に求められる資質能力について」の学生調査と筆者の3年間（本学卒業生）の現職小学校教員の比較調査から
- イ 教員養成を担う発達学専攻の教職課程、授業、教員採用対策を繋ぐPDCAから
- ウ 育てる教員採用試験対策の実践から
- エ 4年生教職実践演習の実践から

## 2 調査から

ア 学生（4年生）と本学卒業生を中心にした現職教員（H29より3年間）の比較調査から

- ・ 本学4年生30人、本学卒業生現職小学校教員61人に対して、資質能力について上位3つを挙げる方法を実施

表1. これから求められる資質能力について

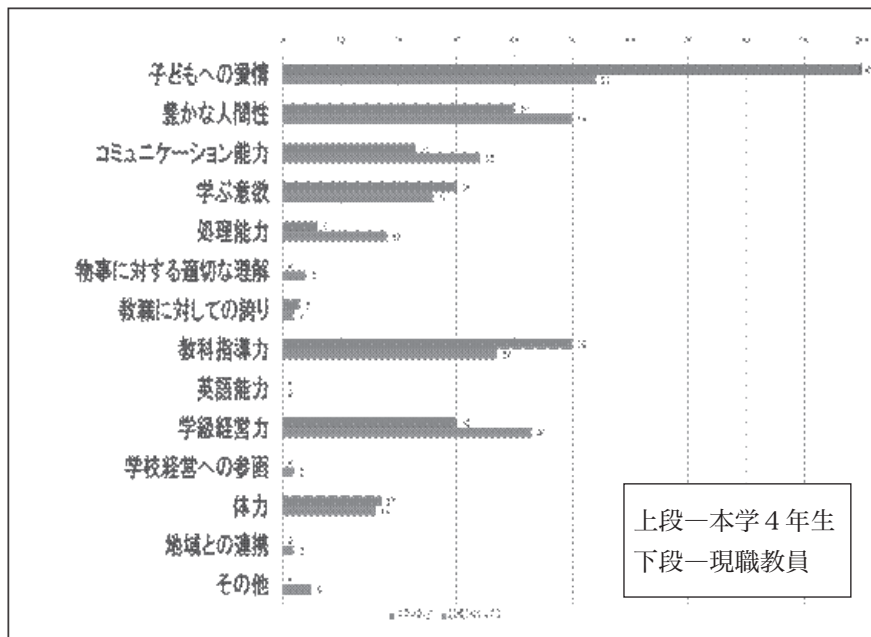


表2. 調査結果

<学生>	<現職3年以内>
1 子どもへの愛情	1 子どもへの愛情
2 教科指導力	2 豊かな人間性
3 豊かな人間性	3 学級経営力

<学生>

14項目全てにおいて0%が次の5項目ある。

①物事に対する適切な理解、②英語能力、③学校経営への参画、④地域との連携、⑤その他なし、と偏りが見られる。

<現職>

割合は少ないものもあるが、14項目全てが選択されている。現職が学生より多い割合は、①コミュニケーション能力、②処理能力、③学級経営力である。その他では、現職しか実感できない「気遣い、気配り」があった。同学年や先輩、管理職、その他の職員という集団、地域という環境で働いているからこそ感じることであろう。

<学生と現職>

どちらも子どもへの愛情が1位である。3位以内に「子どもへの愛情」と「豊かな人間性」があった。特に学生は「子どもへの愛情」が100%であった。教員は人を育てる職業であることから、学生も現職も彼女達の原点はここにある。英語能力が双方0%というのは、今後の教育の課題である。英語科になったが、まだまだALTや専科教員に頼る部分があり軽い存在の教科なのではと思う。

ただ、現職でありながら「教職への誇り」が現職の方が少なかったのは、忙しさ、仕事の多さ等に「誇り」

を実感することが少ないのではと憶測する。

教師経験のない学生にとっての課題は、授業のみでは培われない体験が必要と考える。それを大学という環境の中でどのように資質として能力として育てるという課題と、現職の課題も見えてくる。

また、数値ではなく割合から見ると「処理能力」が必要だというのが現職の方が学生より1番多い。

今や、学校は通知表も評価もエクセルで、内容や生活等様子記述も担任の手書きではなくコンピュータ記述になりつつあり、学力向上で一人一人の評価データが増加している。併せて提出書類もコンピュータで送信が増えている。携帯ではなく、コンピュータ文章を速く打てるのか、使いこなすことができるのか、どうかも時間の短縮や提出日に繋がる。

つまり、これは事務処理やコンピュータ能力、技能をもっと学生時代にもっと身に付けておくことが必要だと考える。

本研究では、現職と比較して教員養成において本学科で改善できることをPDCAで試みた。

#### イ 教員養成を担う発達学専攻の教職課程

表3. 4年間で教員養成を担う改善点一部

	ア 小学校体験	イ 前期	ウ後期	エ 保育士 実習	オ 幼稚園 実習	カ 小中学校 実習
1 年生	・学校からの要請 (単発でも)	・後期に 体験可	・隣研受講 ・単位導入 ・選択	GPAによる4年生実習		
2 年生	・学校からの要請 (事前事後指導で GTの講義)	・GTの決定 ・校長会等へ ・夏休み事前 訪問	・事前事後講義 ・心得、きまり	・2月 2週間		
3 年生	・教育実習前に必修 (小学校基本) ※事前事後指導講座	・県内・各自 自治体	・事前事後講義 ・小学校教育実習	・2月 2週間	・9月	・9～11月 4週間 ・介護等体験
4 年生 教師	・教師を目指す学生 のGT体験活動 ・教職実践演習で学ぶ 公開授業参観、初任 者指導員講話等	前後期 スキルアップ授業 ・県内 ・北九州市 (各自治体)	・事前事後評価 教職実践演習 (ニーズ対応)	・5～7月 施設実習 (宿泊実習)	・3年生 で未実 習者	※特別支援実習 後期2週間
		7月8月9月前教員採用対策 自治体別対応		GTの良好な体験が必修		

改善点について、小学校でのボランティア体験活動が教育実習前条件として不明瞭であった点を改善し、ボランティア活動記録ノートを作成し、現在は2年生後期より教育実習前に一定程度を継続体験し担当へ提出すること。グリーンティーチャーノート（ボランティア活動記録等）また、小学校教員を目指す学生は卒業まで継続することが恒常化した。

教員採用試験については、採用試験の受験ノウハウのみが目的化せず、授業スキルアップ（2年生から実施）、討論や小論文、自己分析等、自分のよさや課題を解決していくきっかけと意欲、向上心、自分の成長を感じる線になるように試みた。また、同じ仲間としての同僚協働性をも育む。

毎年、教員養成カリキュラム、授業の内容、連続性、外部講師の活用、その他の活動内容や質を修正改善していった。

## ウ 教員採用試験対策を日々の実践から

4年間で、授業（指導法）・教員採用対策・体験を日々と繋ぐ取り組みを繋いだ。

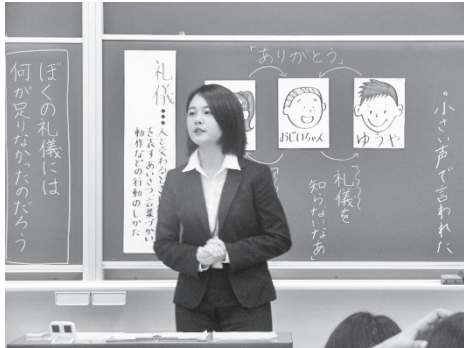


写真1. 教科等指導法での模擬授業



写真2. 教材研究を重ねた模擬授業



写真3. 模擬授業後の相互評価



写真4. 課題解決に向けて話し合う

上記の写真は、各教科の指導法や特別支援教育において課題提示されからグループで解決する様子である。模擬授業では、教師役として身なり整え、話す言葉にも注意を払う。普段馴染んでない教師役以外の学生は児童役として発達段階に応じて参加する。教師役は指導案作成を個人や共同で行い本時で実践する。発問内容や板書、対応等45分間内で行う。指導法の普通の授業でも、人前に立ち、授業をするのは緊張する。予想しない反応がある、思った通りに答えてくれない。授業後の観点にそった相互評価も今後に生きる学びである。教育実習ではさらに授業の難しさを実感する。

その「体験」という点が採用試験という本番で、各自模擬授業やその場で提示される授業課題からの構想、教師と児童役の二役を演技をしたことによりチャレンジする。日々の大学での授業での体験が線になっていく過程に採用試験があり、教師になるという意欲と向上心等を強くもつ過程でもある。



写真5. 授業での学習支援



写真6. 休み時間の取り組み

(上記の写真より) 数年間のボランティア体験活動により現場の教員の授業や仕事への使命感を実感する。教育実習前には、必ず本学グリーンティーチャー制度(グリーンティーチャーとは九女独自の名前である。グリーンは若葉、芽の新鮮を表し「これから」を意味する)を行うのが必修である。小学校ボランティア活動であるが、教育実習や教師として身に付けるべき資質に効果的である。反対に理想とは違う場面に出会うこともあるが、いろんな意味で現実から学ぶことができる。学校の内側から教員の仕事を体験することができる。

これから教師を目指す学生が教育実習後も継続しているという事実は、本学制度が有効的であることを表している。教員採用試験においても自分の体験として事実から言える点で効果的である。

人前に立って話すことに慣れ、教師としての言葉の使い方や敬語、目線、仕草等も身に付くからである。ボランティア受け入れ校では、授業だけではなく研究発表会への補助や、給食時間や掃除時間、運動会、スポーツ大会等の補助として現場で教員の補助にあたる体験をする。半日または、1日を原則として活動する。回数に制限はないが、教育実習前には10回以上という内規がある。また3年生実習には、1,2年生のGPAも内規としてある。4年生で成績やコース変更等で行く学生もいるが、「小学校教師になりたい」という意志があれば乗り越えている。

グリーンティーチャー制度(小学校ボランティア活動)は、各自、自分の授業時間や生活時間を判断して相手校へ受け入れ可能かどうかを確認する。自分でアポをとり相手校と面談することも自立自律の一步と考える。勿論、事前事後指導において必要な指導は、時間をかけて行う。

小学校からの要請も昨今は人手不足もあり多いが、あくまでも雑用としての人員不足を補うボランティア活動のみではなく、教師として学びがある授業の参観や支援として活用していただける学校に継続して活動している。学校と大学の関係と信頼も大切である。

#### ウ 育てる教員採用試験対策の実践から

4年生合格者が、これから採用試験を受験する3年生に向けて実演し、後輩に伝える。



写真7. 4年生による模擬授業実践



写真8. 4年生自治体別模擬授業



写真9. 4年生が集団面接を実演



写真10. 4年生が合格までの過程を発表



写真11. 自治体別に合格までの過程を発表



写真12. 4年生最初の土曜強化学習でチーム力



写真13. 英語での面接対応を3年生2月



写真14. いつでも学べる環境づくり

上記写真7, 8, 9, 10, 11は、4年生（合格者）が採用試験での実際を見せている。3年生に目指す姿を見せることが、これから採用試験を受ける3年生には、最も効果的である。実際に目指す具体的な姿があるからである。4年生の発表に、当初は「あんなに面接では答えられない」「堂々としてあんなに模擬授業構想はできない」「自分にできるかどうか不安・・・」といった声が多く聞かれたが、目標や目指す姿がわかればそれに向かって学生は努力する。写真12は、4年生になり、土曜日1日、採用試験勉強の日としているが、何よりもチーム九女として仲間意識が生まれる。

写真13について、英語が教科になり、面接も英会話やスピーチの内容も変わってきた。学生達の小学校時代は英語体験学習であり、教科ではなかった。また英語指導法はあるが、日頃はnativeに接することがない環境にある。数回であるがnativeによる全てを英語で話すという英語体験授業を受講した。短い回数であったが、外部講師の活用の一つである。その他、写真14は先輩達が残した資料を活用したり、コンピュータを繋ぎ自由に検索や指導案作成等ができる自習室の環境整備である。



写真15. 初任者指導の講師による講話



写真16. 公開授業、協議会を参観参加

次に写真15、16は、教職課程にある4年生教職実践演習での、一コマである。教職実践演習は、4年生後期の授業としてのまとめの授業である。これから実際に教員としてまた社会人として学ぶ最後の授業である（卒論を除き）。そこで、主に教員として4月より現場に赴任するためにより実践的で有効な内容に改善した。

#### エ 4年生教職実践演習の実践から

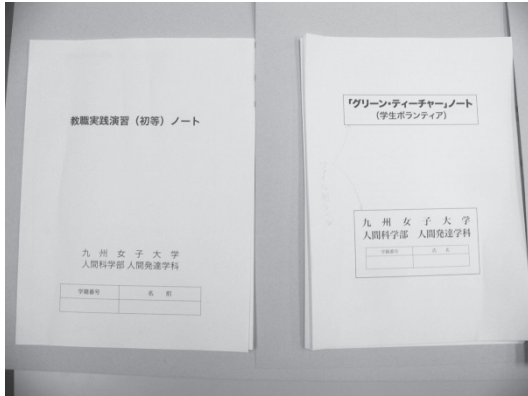


写真17. 教職実践演習ノート（左）  
グリーンティーチャーノート（右）

また、毎回の講義や2回の学外研修や外部講師招聘による講話、複数教員による講義では、専門性を生かした内容であり15回の授業を1つにまとめて、教育実習やボランティア活動等を含めて4年間を振り返ることができるノートを作成した（下記写真17）。

その都度課題に応じてプリント配布する従来の形式ではなく柔軟に活用できるノートにした。振り返り後には、一人一人がスピーチする

### 3 考察

#### (1) 教師に求められる資質能力から

○文部科学省が掲げる「生きる力」から

知・徳・体のバランスの大切さを示している。知は「確かな学力」、徳は「豊かな人間性」、体は「健康・体力」である。生きる力の構造（文部科学省）では、「確かな学力」とは基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え、判断し、表現することにより、様々な問題に積極的に対応し、解決する力。「豊かな人間性」とは自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性。「健康・体力」とはたくましく生きるための健康や体力と構造化している。それら3つがバランスよく重なり合って生きる力となる。一つだけを突出したものを狙っているのではない。それらを理解した上で教師は、授業等を日々行わなければならない。

確かな学力を児童に身に付けるのは、教師の授業づくりである。教師の学習指導における専門性がなければならぬ。国語、算数、理科、社会、音楽、図画工作、体育、英語、生活、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、全てを指導することを求められる。中には教師自身が苦手なものもある。しかし、指導できなければならない。どの学年でもどの教科等でも指導できることが前提である。採用試験に必要な知識・技能、基礎基本等を、学び直す機会と捉えることに意味がある。

また、アンケート調査（学生）では、教科指導力が学生は2位であった。教科としては道徳はこの調査段階では、移行期間でもあり、テストのあるものを教科を考えている。学生は、ボランティアで授業を参観し「授業の上手い先生」を尊敬し、「そんな先生になりたい」と思い実感している。

「豊かな人間性」には、教師自身にその豊かな人間性がなければならない。アンケート調査でも豊かな人間性は現職、学生ともに3位内に入っている。自律、協調、思いやりの心等、自分自身、自分と他、集団や社会への関わり、生命、自然や崇高なものへの関わりなど、道徳科の内容項目からもこれらは教員にも求められる豊かな人間性の大切な資質である。いじめの件数が増加傾向である。道徳科では検定教科書を使用した授業をする。国語や読み物資料にならないような授業力が求められる。アンケート調査では、豊かな人間性は、現職の方が学生よりも多く2位であった。現職の方が資質として重要だと思っている。「豊か」の捉

えは、各自、異なると思うが現職も学生も上位にある。教師に協調性や思いやり、正義感、人や他を愛する心等がなければ児童との信頼関係も築けないと思っていると考えた。しかし、今回の調査では、その内容まで尋ねなかったことから今後の調査の課題である。

「健康・体力」は、健康は、当たり前のことであるが、近年、体力向上の取り組みが体力テストという結果で公表される。アンケート調査では、体力は現職も学生も同じくらいで全体では20パーセント程である。3年位内の若年教員と学生対象であることから、まだまだ健康・体力には自信があることから考える。児童への健康・体力となると体育の授業での技能指導、体力テスト項目への取り組み、特別活動で健康に関する指導を授業としてする必要がある。

近年各自治体採用試験では、運動技能の実施は、減少傾向にある。教員自身が心身ともに健康であることを自覚するのは、やはり教職に就いてからである。採用試験では運動技能のみである。マット運動、ボール運動、水泳等である。運動技能を身に付けるのは、できるようにする指導ができることである。できない学生は、夏休みにできるように日々練習に励みできるようになる。特に本学では、大学体育科教員の指導も受けられる。この経験が教職に生きる。運動が苦手な児童の気持ちも理解でき、指導したり励ましたりすることもできる資質・能力になる。音楽でも同じことがいえる。

採用試験を通して「生きる力」の一端を習得し学んでいる。

#### ○中央教育審議会の答申から

中央教育審議会の答申は、教師に求められる資質・能力について不易と流行という点からみると不易の資質・能力と時代の変化に応じて求められてきたことがわかる。キーワードからみる。

##### ア 平成17年10月 中央審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」

- ・教職に対する強い情熱 ・使命感、愛情、責任感、向上心
- ・教育の専門家としての体かな力量 ・授業力、児童理解力、生徒指導力、学級経営力等
- ・総合的な人間力 ・豊かな人間性、人間関係力、コミュニケーション能力、協調性等

本答申では、教師に対する信頼と確立するための「あるべき教師像」が示されている。

##### イ 平成24年8月 中央審議会答申「教職生活の全体と通じた教員の資質能力総合的な向上方策」

- ・教職に対する責任感、探求力、使命感、責任感、教育的愛情、学び続ける力 ・総合的な人間力
- ・専門的職としての高度な知識・技能、専門的知識、実践的指導力、教科指導、生徒指導等

本答申では、社会の急激な変化に伴い対応することが必要とされ、学び続ける教員像と3つの力の相互関連の必要性が述べられている。

##### ウ 平成27年12月 中央審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」

不易の資質能力として、使命感、責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的な人間力、コミュニケーション能力等

- ・生涯にわたって高めていく資質能力、情報収集力、知識の活用能力 ・組織、連携、分担、協同
- ・アクティブラーニング、授業改善、道徳教育、小学校外国語教育、ICT活用、特別支援教育

本答申では、どんな時代にも変わらない不易の資質能力としてまとめられた。

#### ○「教師の仕事の流儀と作法」監修寺尾慎一、編集永富淳一、執筆大和淳他10名による共著から

次の様に共通する要素を平成17年、24年、27年答申から分析表にしている。教師の①人間性 ②専門性 ③社会性の3つに整理している。(以下、引用抜粋)



表4. 各答申での共通要素

① 教師の「人間性」について、子どもと同じ思いを共有することができる資質・能力は、教師の人間性から生まれてきます。それが「教育的愛情」なのだと思います。教師の「人間性」とは、決して最初から教育者としての完璧な姿をもとめているのではなく、むしろ不十分さや未熟さを自覚し、それらに真摯に謙虚に向き合っ て学び続ける姿にこそ表れます。
② 教師の「専門性」について、学校教育を担う教育者に求められる「学習指導要領面」と「生徒指導面」の2つの側面から捉えることができます。専門性の中で最も重要な能力は、子供の学力を育てる学習指導力です。具体的には、「授業づくりの力」、「教材解釈の力」、「教科指導を的確に実践できる力」などの授業実践に関わる専門的な能力がとめられる。生徒指導面での専門性は、生徒指導も同じく重要な「専門性」です。前述の学力向上に関する指導の基盤ともなる子供の個々の特性や関心、意欲、生活力などの向上をめざして発揮される専門性です。
③ 教師の「社会性」について、教師は学校組織の一員としては「教職員」であり、社会的な立場としての職は「教諭」です。そして子供や保護者、地域からは「先生」と呼ばれます。この「先生」と呼ばれる背景には、大きな期待が込められています。…子供に粘り強く寄り添い、意欲を引き出し、可能性を信じ続ける教師には「人間性」や「専門性」という熱く豊かな愛情とともに、「社会人」としても頼もしく安心して任せられる社会のリーダーとしての資質・能力がとても重要です。

『魅力ある教師の資質・能力は、「社会性」を車軸とし、「人間性」と「専門性」を両輪として子供を乗せ、たくましく前進する車と言えます。』と述べている。

3つに整理された共通の資質能力において社会性は総合的人間力であるが、そこに豊かな人間性や同僚性、チーム力、多様な組織と連携・協働できる力等と平成24年の答申にはある。社会性の大事な要素に人間性は包含されている部分が多いと筆者は考える。集団と個人という関係性や環境において表出、発揮されると考える。本書筆者が述べるように各要素が独立してあるのではなく3つの共通要素がお互いに1人の教師・教員という教育専門職というプロに必要な総合的に要素として培われていると考える。偏った資質能力は危険と考える。

不易とされる資質能力は、いつの時代でも教員に求められる資質能力として本調査研究の項目に重なる。教育的愛情、豊かな人間性、教科指導力は専門職としての指導力、学級経営力の上位3つは不変の資質能力として現職・学生ともに選択した資質能力としてあげられている。平成27年にまとめられて不易の資質能力にあげられた項目から分析すると、現職と学生の体験の差がそのまま調査の結果項目に表出されている。

学生は、学級経営力、地域との連携、物事に対する理解、学校経営への参画、英語は選択されていないのは、現場体験がない。実際に直面していないのでその重要性が学生でできる体験に限界がある。

現職は、不易の全項目に割合の違いはあるものの、全て選択されている。その他の気遣い等も協調性の一端を表している。

#### ○今後の課題

資質は見えにくい。「創造性、使命感、愛情、向上心等、自分の評価基準による。」授業力や表現力、知識・技能は他と比較し明確に表れる。3つの答申からも今後教員養成カリキュラムもICT、プログラミング、英語、環境等に対応する内容の教職での授業が必要である。調査項目に時代の変化に対応したICT、特別な支援を要する児童の教育、インクルーシブ教育、道徳、英語、授業改善（アクティブラーニング）、グローバル化に対応した資質能力を継続調査することから、今後も改善したい。

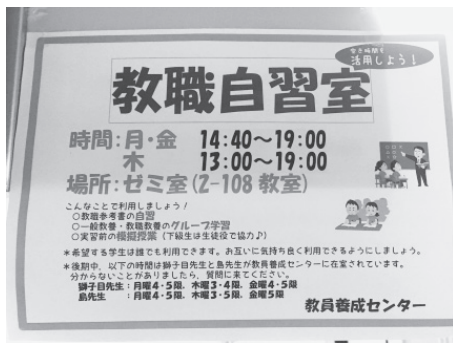


写真18. 教職・採用試験対応教員実践センター



写真19. センター環境整備と常時職員在住

視察から、本学の教員養成の環境面の改善を感じた。鹿児島純心女子大学の視察から小学校教員をめざす学生にとって、いつも利用できたり、尋ねたりできるセンターがあることである。採用試験関係、教育実習やボランティア活動等、教職に関する全てを専門職員が担っていた。常時在住で学生からの相談にも対応している。本学科教員採用担当教員が全てを担うことの効果と課題は今後も検討の余地がある。

本研究では、現場と本学科を結ぶ取り組みを授業でも2年生から実践している。カリキュラムには表せない日々の実践もある。挨拶、所作、言葉遣い、身なり等日々の小さな取り組みと言える。

「ローマは1日としてならず」。PDCAで今後も教職実践演習ノート、グリーンティーチャーノートの修正、教職課程授業の内容の改善、強化学習や本学科教員採用授業の在り方、学校現場に対応したボランティア活動、教育実習の指導等、常に変化に対応できるように本調査研究を主とした教員養成の在り方を今後も継続して実践していきたい。

#### 引用文献

監修者 寺尾慎一、編集者 永富淳一、執筆者 大和淳、山下英俊、榎田也寸志、木原貞美、羽原哲男、水上栄一、宮下修司、坂田紳一、篠崎勝博、日高孝一、宮内健二

『教師の仕事の流儀と作法—信頼され、敬愛される教育者となるために』p.33

#### 参考文献

文部科学省 平成29年告示 小学校学習指導要領

文部科学省 平成22年 生徒指導提要

畑田夏希 『これからの教師に求められる資質能力について』(2013九州女子大学卒論)

編集者 佐々木司、三山緑、執筆者 佐々木司、櫻田裕美子、八木秀文、金井裕美子、熊井将太占部匡司、杉田浩崇、三山緑、田代直人、上寺康司、松村納央子、奥田久春

『これからの学校教育と教師』

---

**A essay about the method of the teacher education in the Department of  
Education and Psychology of the Faculty of Humanities  
From a viewpoint corresponding to the needs of the field of education**

Harumi SAKATA

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University  
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

In the Department of Education and Psychology of the Faculty of Humanities, the student can obtain many licenses and many qualifications. In the child development course of the Department of Education and Psychology, many students aim to become elementary school teachers. In teacher training course, the student learns a learning method, knowledge and skill to become a teacher and experiences student teaching and volunteer activity. By this paper, we made clear how we brought up a student equipped with "teacher's quality and ability". Also, we not only aimed to make a student pass an examination but searched for the way of the education that a student can learn from the various experiences. Then we performed a questionnaire to students and professional teachers. We clarified the requirement effective in the class of the school teaching practice and student's volunteer and moreover necessary. And we clarified a necessary matter to train a teacher by analyzing the curriculum for the teaching profession and the experience of the student. We connect a school and a student and want to study a method to educate the student who acquires ability as the teacher continuously in future.

Keywords : teacher education, teacher, teaching profession, quality, ability, student, professional teacher